

横須賀市立うわまち病院（横須賀市）

大川智子

横須賀市立うわまち病院は横須賀陸軍病院として変遷し、昭和20年から国立横須賀病院、平成14年から横須賀市立うわまち病院として開設されました。現在の病床数は417床です。横須賀中央駅西口より出て、横須賀モアーズの横を通り、商店街の中を進み10分少々歩くとうわまち病院に行きつきます。道中、コンビニエンスストアは数軒あるものの、主に個人経営のお店が並んでいます。帰宅時に暗くなった商店街を歩いていると、昔ながらのたい焼き屋さんやコロケ屋さんなどにお客さんが並んでいる姿が見受けられます。

400床ほどの規模の病院ではありますが、地域の救急医療を担う病院です。近年の新型コロナウイルス感染症の流行により、病院全体として手術や検査が思うように行えない時期もありました。しかしながら5類感染症となり、病院の診療体制も次第に流行前の状況に戻つつあるのを感じます。

現在の皮膚科のスタッフは筆者と熱田先生の常勤医師2名です。皮膚科全般について診療しています。分子標的薬使用承認施設であり、難治性の尋常性乾癬、掌蹠膿疱症、アトピー性皮膚炎、慢性蕁麻疹、円形脱毛症に対して、症状に応じて生物学的製剤の注射やJAK阻害薬を含む内服薬による治療も患者さんと相談しながら積極的に行っています。

紫外線照射機器はエキシマライト、全身型NB-UVBでの治療が可能です。パッチテスト、プリックテストによる精査も行っています。筆者が日本接触皮膚炎研究班に参加していることもあり、「化粧品等アレルギー確認方法確立に関する研究」（主施設：藤田医科大学アレルギー科）の一環として、患者さんの同意が得られれば、モリブデンやジルコニウムなど普段は行えない金属のパッチテストが行えます（本年6月までの予定）。



皮膚科医師と外来看護師

皮膚腫瘍については、日帰りの局所麻酔下の手術で単純切除術、植皮術、皮弁形成術も必要に応じて行っています。部位や大きさによっては形成外科に依頼することもあります。

うつ滞性皮膚炎に対しては、当院心臓血管外科では下肢静脈瘤の治療を多く施術されており、血管内レーザー治療やグルー治療を外来で行っています。当科では圧迫療法の指導をしながら、エコー検査で静脈瘤があれば心臓血管外科と連携して治療を進めていきます。

高圧酸素療法も行える設備が病院にあり、合併症や全身状態に問題がなければ、皮膚科領域では難治性潰瘍をとまなう末梢循環障害の患者さんに対して治療が行えます。

「病院は病院らしく」をモットーに、当科を受診された患者様にはできるだけ悪化の原因を検索して、取り除いて、少しでも良くしたうえで地域の先生方の元にお戻ししたいと努めています。必ずしも原因にたどり着けないことも往々にしてありますが、血

液検査、画像検査、薬歴の確認、DLSTの検査、皮膚テスト、皮膚生検など、診療所やクリニックでは設備や時間の都合で行いにくいかもしれない検査を積極的に行っていきたいと考えています。

近隣で皮膚科小手術、皮膚生検、皮膚テスト、光線療法、乾癬・掌蹠膿疱症・アトピー性皮膚炎・慢性蕁麻疹・円形脱毛症などで追加治療が必要な患者さんがいらっしゃいましたら、ご紹介いただければ幸いです。

当院は100年以上の歴史のある病院ですが、その一方で病院の建物は築50年以上経過しており、老朽化が進んでいるため、横須賀市上町から神明町へ移転建て替えを予定しています。敷地内の桜の木は長い年月を経て大きく立派に育っていますが、今年で見納めになります。

新病院は令和7年3月1日の開院を目標に現在準備を進めています。気が付けば今年度中に迫ってきました。新病院の名称は横須賀市立総合医療センターです。最寄り駅は京急久里浜駅になります。移転の前後は何らかの診療制限を要する可能性もあり、ご迷惑をおかけすることもあるかもしれません。



病院の入り口 満開の桜

病院の場所や名称が変わりますが、今後とも横須賀市立うわまち病院をよろしくお願いいたします。

独立行政法人労働者健康安全機構 横浜労災病院（横浜市港北区）

佐藤 勘治

当院の正式名は上記のごとく長いのですが、通常は「横浜労災病院」略して「横労」と呼ばれています。そもそも「労災病院」という立場の病院として誕生したのかということから話をさせていただきます。戦後は労働条件も環境も悪く、数多くの死亡事故が起っていました。そこで、1947年に労働基準法、労働者災害補償保険法が制定され、災害専門の病院として1949年、労災病院第一号として九州労災病院が設立されました。厚生労働省のホームページによると、「労働災害とは、労働者が業務遂行中に業務に起因して受けた業務上の災害のことで……（中略）。ただし業務上の疾病であっても、遅発性のもの及び食中毒、伝染病は除く。なお、通



4月時点での全皮膚科医

勤災害による負傷、疾病及び死亡は除く。」とされており、かなり限定された疾患のみを扱う病院が労災病院ということになります。それでも当時は入院患者の約60%が労災患者だったそうですが、法の整備や業務形態の変化もあり、1970年頃から労働災害による死亡事故は急激に減ってきました。そのため1980年以降は労災病院に入院する労働災害者は全入院患者の20%以下となり、労災病院の使命そのものを変える必要性が生じ、「労働災害」から「勤労者」のための病院へと変化しました。実際には、働いていない人の診察もしていますし、働いている人には平日日中の通院は酷なようにも感じますが、病院の使命としては「勤労者のための医療」ということになっています。

また、当院の病院名の前にある「独立行政法人」とは、総務省のホームページによれば、「公共上の見地から確実に実施されることが必要な事務・事業のうち、国が直接実施する必要はないが民間にゆだねると実施されない恐れのあるものなどを実施する法人」となっており、個人的に解釈すると、ないと困るが売上げが低いため民間企業にゆだねると行われなくなる恐れのある事業をサポートしてくれる組織、まさに病院内の皮膚科を守るためにあるような組織のように聞こえますが、実際の風当たりは強く感じます。

もう一つの接頭語である「労働者健康安全機構」とは、労働者健康安全機構ホームページによると、「独立行政法人労働者健康安全機構法に基づいて設立された、厚生労働省が所管する法人」となっており、これも個人的に解釈すると、独立行政法人は厚生労働省がサポートもしてくれるが、命令にも従わなければならないという鎖のような接頭語にも思えます。病院に勤務する医師にとって「働き方改革」は無縁のものと思っていましたが、当院はかなり頑張って導入していくことになります。誰かが犠牲になるしかないようにも思いますが。

横浜労災病院は、港北ニュータウン開発事業の一つ、横浜市北部の医療施設整備のために、1991年横浜市からの要望で39番目の労災病院として誕生

しました。労働基準局としては従来型の整形外科を中心とした病院ではなく、21世紀でも誇れる高機能医療を提供できる病院として設立されました。交通の便はとてよく、東海道新幹線、横浜線、市営地下鉄線、相鉄東急新横浜線が乗り入れています。駅からも徒歩10分程度、バスも運行されています。車でのアクセスも良く、第三京浜や首都高のICから5分程度です。また、近くには日産スタジアム、横浜アリーナ、KOSEスケートセンターがあり、しばしば有名人にも遭遇します。ドラマの撮影に使用されたこともあります。歩いて3分くらいの所にラーメン博物館があり、いつでもおいしいラーメンを食べに行けます。

最後に少し当科の状況話をさせていただきます。主研修施設は北里大学と聖路加国際病院で、医師は4人、うち3人は1～2年で異動になります。中堅はいません。外来看護師は週替わりで1人いるようですが、実質、処置も案内も医師の仕事になっており、とても効率が悪いです。病院全体から見た当科の売り上げは0.5%程度で、今の倍頑張っても評価は上がらないのですが、少しでも病院や患者さんのお役に立てるよう日々奮闘しています。病院皮膚科として、入院、手術、検査に特化した皮膚科を目指しており、新たに「生検紹介枠」「手術紹介枠」「バイオ目的枠」を作りました。予約取得時に紹介目的を伝えるよう患者さんに案内をお願いします。紹介状も3行くらいで構いませんが、目的を明示していただくと助かります。外来の内訳は再診が約8割で初診を診る余裕があまりないため、逆紹介にもご協力をお願いします。

私から神奈川県皮膚科医会へのお願いです。病病連携や病診連携を強くするために、それぞれがどこまで治療できるのかがわかるようなシステムや一覧を作っていただけると、紹介や逆紹介がしやすくなるためご検討をお願いします。

私情の多い内容になってしまいましたが、病院を紹介させていただく場をいただきありがとうございます。

【病院について】

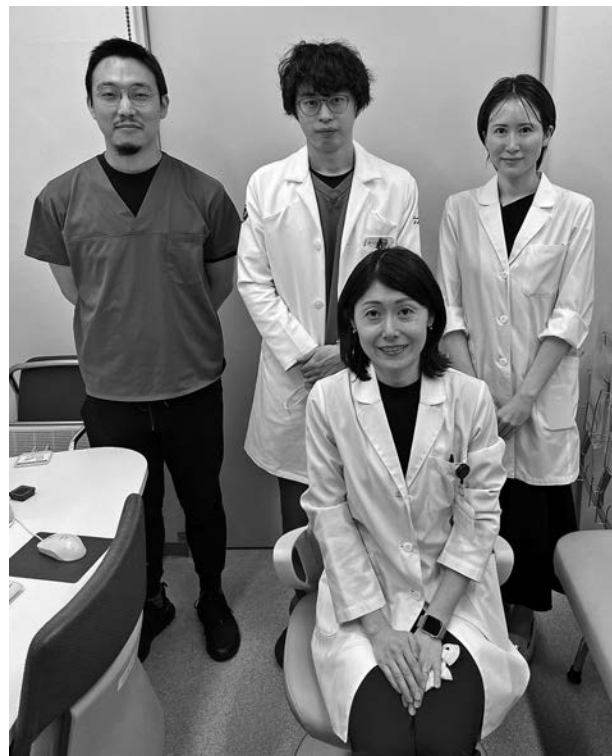
横浜市北東部の基幹病院として2007年に開院し、三次救急救命センターをもつ高度急性期医療を担う病院として、主に横浜市鶴見区、港北区、神奈川区、川崎市幸区から患者さんの紹介を受けています。当院の周辺には、楽SPAをはじめとした入浴施設が並び、病棟からは国道1号線や鶴見川が見えます。

皮膚科に関連する当院の特色の一つとして循環器内科を中心としたフットケア外来があることです。循環器内科が重症下肢虚血や糖尿病性足壊疽などの血流評価から血行再建、感染コントロール、創部処置を並行して行ってくれています。当院は外科系の診療科が活発で、562床あっても予定入院と退院調整待ちの患者にて満床のことが多く、皮膚科に限らず緊急入院を速やかに受け入れられないことが病院の課題でもあります。

【皮膚科について】

慶應義塾大学皮膚科学教室の関連病院として、2007年から畑康樹先生が初代部長を12年間務め、2018年から現川崎市立川崎病院部長の西本周平先生、2020年からは渡辺が中心となり診療を行っています。済生会神奈川県病院の皮膚科外来も兼務し、2024年度は3名体制となっています。

紹介受診重点医療機関の推進により、外来患者の多くは生物学的製剤やJAK阻害薬を使用しているアトピー性皮膚炎、円形脱毛症、尋常性乾癬であったり、自己免疫性水疱症や膠原病、化学療法、放射線療法を行っている悪性腫瘍の方など、以前より外来患者の疾患に偏りが出てきているように感じます。皮膚科の入院患者も帯状疱疹や蜂窩織炎が減り、中等症～重症の自己免疫性水疱症、スティーブンスジョンソン症候群などの重症薬疹、Ⅱ～Ⅲ度熱傷、そして全身麻酔で行う悪性腫瘍、プロプラノロール導入目的の乳児血管腫が中心です。皮膚生検は、外来の隙間時間に適宜行っています。病理と臨床を照らし合わせて、興味深い症例については、これ6



2024年3月時点の皮膚科メンバーと共に

KK（神奈川県慶應関連病院の勉強会の略です）症例だねと言いながら検討したりしています。

2022年に形成外科が常勤になって以来、月曜午後の手術枠は形成外科と皮膚科の共同利用となり、主に全身麻酔での悪性腫瘍切除、植皮、時に皮弁形成などを行っています。皮膚科の後期研修医が腫瘍切除や縫合の手技を形成外科医から直に指導を受ける環境が作られ、術前には形成外科と皮膚科で切除方法や再建方法について率直に議論し、形成外科とはよい連携ができています。以前から画策していても制約がありなかなかできなかったセンチネルリンパ節生検が、メルケル細胞癌の症例がきたことをきっかけに、今年3月、ついに核医学部門との連携により実現できました。

【済生会神奈川県病院との連携について】

2023年の院長ヒアリングの際、そこまで多くはないのですが皮膚科の蜂窩織炎の入院患者数が問題になりました。私は病床が空いていたら今日はラッ

キーという感覚で入院を入れるようにしていたのですが、病院としては、皮膚科より他科の病床を確保するため、済生会神奈川県病院（以下県病院と略します）で治療できるようなものは、最初から県病院へ転送してほしいということでした。そのため、安静と抗生剤投与目的の単純な蜂窩織炎の入院案件については、なるべく県病院で行うように努めています。

またここ最近どこの大学も直面している、皮膚科専門医を取得後、医局を辞めフリーランスになる流れが慶應にも押し寄せています。県病院のような亜急性期病院の外来や病棟管理ができるような医師を確保できないのが現状で、2024年は県病院の皮膚科診療を縮小せざるをえなくなりました。特に神奈川区の先生方にはご迷惑をおかけしております。

【レーザー診療・乳児血管腫の治療について】

木曜午後に異所性蒙古斑、太田母斑などに対し、アレキサンドライトレーザーによる青あざ治療を行っています。美容レーザー外来も作り、職員や紹介患者のしみ治療もできる範囲で行っています。ま

た、当院では瘢痕を残す可能性のある乳児血管腫に対し、5泊6日でプロプラノロールの導入を行っています。近隣の小児科や皮膚科からの紹介患者も増えてきており、早期の診断と治療介入の意義が浸透してきていることを実感しています。

【ハンセン病について】

最近20代のネパール人女性が、顔、四肢の環状紅斑を主訴に来院されました。以前、川崎病院に勤務していたとき、宮川俊一先生が東南アジア出身の20代男性を定期的に外来で診察し、処方しているところに私も同席していたため、ハンセン病と診断することができました。石井則久先生と三上万理子先生がお忙しい中、スメア検査などのため当院へ足を運んでくださり、皮膚科医の横のつながりの素晴らしさを感じる機会となりました。

末筆ながら、地域の患者さんに最適な医療を提供できるよう、日々努めてまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻いただければ幸いに存じます。

